平成１９年度海外研修報告

山口大学医学部附属病院　放射線部　　米沢　鉄平

私がこの研修に期待していたことは、スタンフォード大学で分子イメージングなどの先進的な講義を受け、また実際に研究施設を見学することにより、医療とイメージングに携わる者としての将来像を掴むことでした。また MRI を用いた機能・代謝測定や質的診断に関する知見を持ち帰り、自分の今後の活動に役立てたいと考えていました。

Clark センター地下にある分子イメージラボには、小動物用のイメージング機器が各種揃えられており、まだ稼動してはいませんでしたが小動物用７TMRI も見せていただくことができました。これらの設備を他施設の研究者にも貸し出し研究を進めてもらうことにより、この分野の開発や発展を促進したいという考えだそうです。また、次々と分子イメージングに関する研究施設を建築中とのことより、この分野にかかる期待とその可能性の高さを感じました。

講義においては、Moseley 先生の High Field MRI や、Gambhir 先生の分子イメージングの考え方とその方向性のお話にとても刺激を受け、中でも 13C によるピルビン酸、アラニン、乳酸などの代謝測定の話はとても勉強になりました。講義全般としては比較的広範囲をカバーした内容で、中には Dual Source CT など私的には少し意外な内容も盛り込まれており、とても充実したプログラムであったと感じます。研修の最後には Glazer 先生に”Forging The Future of Imaging”というテーマで、イメージングの持つ力や、治療とのつながりなどの話しをしていただきました。このような御高名な先生方のお話を聞くことができ、内容はもちろんのことそのプレゼンテーション技術や質問に対する受け答え方などはとても参考になったと感じます。

日本の診療放射線技師としては、研究施設の規模の大きさと効率的な組織体制に感心し、またその様な環境を整える専門のコンサルタントが存在するということに驚きました。日本と米国の研究に対する体制・環境、または臨床現場、医療制度や国民性の違いなど、１週間だけではありましたが実際肌で感じ、逆に日本の優れている部分も再確認でき、とても贅沢な時間を過ごす事ができました。

この研修を通して最も印象に残ったことは、講義やワークショップはもちろんのことですが、Lucas センターでの昼食時にスタンフォードの先生や大学院生の方々を始め、現地スタッフの皆様が私達の所へ来てくださりディスカッションができたことです。私の broken English にも皆様とても真剣に耳を傾けてくださり、それに対して丁寧にコメントしていただきました。自分の語学力の無さを後悔すると共に、コミュニケーションツールとしての英語の必要性を強く感じました。住む国は違えども交流を通じて共通する部分も発見でき、とても有意義な時間となりました。その他、研修に参加された各分野でご活躍されている日本の先生方と知り合い、皆様と毎晩ディスカッションすることによって、クリエイティブなビジョンを持つことの重要性を改めて感じることができました。

今回でスタンフォードにおける研修は２回目となりましたが、来年度はもし可能であれば違った施設での研修が企画されると、より幅広い情報が日本に持ち帰られることと思います。もしくは相互交流という形で、日本の放射線医療の現状などを現地の方々にご紹介できる時間を設けても面白いと思いました。

最後になりましたが、本研修参加にあたりまして助成をいただきました学会長をはじめ学会関係者の皆様、ならびに研修に先立ち多数の有用なアドバイスをくださいました昨年度研修参加者の皆様方に厚くお礼申し上げます。また、研修中にとても細やかな心遣いでサポートしてくださいました GEYMS の皆様方にも深く感謝申し上げます。

写真の解説
Chairman の Gary M.Glazer 先生と筆者。
先生の語られた未来像は、私の道標となりました。